



『 インフルエンザについて 』

インフルエンザはかぜ症候群の一つで、筋肉痛や関節痛などの全身症状がひどく、高熱を伴うことが普通のかぜと異なります。原因はインフルエンザ・ウイルスで典型的症状としては突然の発症、38度以上の高熱、上気道炎症状・呼吸器症状など挙げられますが、最近では検査の進歩により比較的早期でも診断が可能となっています。

インフルエンザが怖いのは、肺炎を合併する場合があります。その頻度は高齢者ほど高く、16～64歳で0.83%、65～79歳で2.06%、80歳以上で13.33%とされています。

発症初期のウイルス本体に対する治療としては抗菌薬が全く効果がなく、2001年以降ではインフルエンザ治療薬の普及が顕著です。特に発症してから2日目までの投与が有効とされています。

しかし、5日以上発熱が継続する場合や呼吸器症状が増悪する場合、また意識障害が出現する場合は、肺炎や脳炎を合併している恐れがあります。再診・検査した方が良いかもしれません。

インフルエンザの予防には、予防接種、手洗い、うがい、マスク着用、適度の湿度の保持、十分な休養とバランスの取れた食事、人混みや不必要な外出を控えるなど時季あるいは感染状況に応じた対応が必要です。



鹿児島厚生連病院
呼吸器内科部長
副 島 賢 忠